

# 大学生に望む 2020

学長 小原 芳明

これから大学教育が始まります。大学は高等教育（Higher EducationとかHigher Learning）とも言うように、より高度な学修を行う場であり、機会を得る場となっています。

しかし、総ての学びに共通するのは7つのW（What, When, Where, Why, Who, Which, Whom）と1つのH（How）です。人間のこと、社会のことへの知的好奇心が基盤にあってこそその高等教育です。

先人たちも知的好奇心を満たすために多くの課題に挑戦してきました。そしてその結果が社会に蓄積され、今の高度情報化社会となっているのです。

孔子の教えに「温故知新」がありますが、この時代にあっても過去（基礎基本）から学び、そして新しい価値を作り出していくのも高等教育です。大学には過去からの知識が集積されていますし、価値創造の機会が用意されているのです。

これから君たちは自身の知的好奇心に応えるために新しい知識を得るのですから、その学び舎（知識）に対して

## “Enter with Respect, Leave with Knowledge”

の心構えを大学生の基本としてください。この学問への畏敬と謙虚さはどの時代にあっても、学修の基本です。

学校は英語でSchoolですが、それはラテン語のscoleから派生した言葉です。そのscoleには「ヒマ」という意味があります。ヒマとは、人間が生きていく上で必要な衣食住確保のために働く必要性から解放されて生じる時間です。その暇（余った時間）を活かして「読み、書き、計算」を身に付けさせようとも生まれたのがschool（学校）の始まりです。それが学校教育の不易と言われていることですが、昔と違い、現代は「K-20教育の時代」と称されるほどに修得すべき知識の量が多く学修する時間数も増えてきています。それは学校（幼稚園から大学まで）の教育の根底にあるのは子供たちが将来社会で働いていくのに必要な知識と技術を修得させることにあるからです。

今君たちは大学でさらなる学修のスタート台に立っていますが、こうして大学で学ぶ機会（学修に必要な「ヒマ」）を親から与えてもらえたことへの感謝の気持ちを大切にしてください。

これからの大学機会を「後4年もある」と観るか、それとも「4年しかない」とするかでは大きな差が出ます。昔から「少年老い易く、学なり難し」と言われているように、学問の道は遠く、また険しいものです。中学校の数学で学ぶ方程式に $X+Y=a$ がありますが、これを日常生活に当てはめると、二つの作業を「ながら」ではなく、どちらか一つのために時間を使うということの大切さが理解されるでしょう。大学生ですから、学修のために得られた時間を自分で管理することで高等教育は全うされるのです。

近代の大学は社会へ入り口にもなっています。そのために多くのリソースが大学に集積されていますが、それらを有益に活用するには、まず各人が将来社会でどういった人材になりたいのか夢を持つことです。昔からこの丘で学ぶ生徒と学生を「玉川っ子」と呼んでいます。そして玉川っ子には「一画多い夢」を持ってもらいたいと創立者は願っていました。また、吉田松陰も夢の大切さに

---

ついて次のように言っています。

**夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、  
計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。  
故に、夢なき者に成功なし**

自分の夢（大志）を描き、その実現へ向けて大学で学ぶその道は厳しいことですが、その厳しさを乗り越えてこそ新しい時代に相応しい新しい知識と技術を修得するのです。そしてそれは社会人としての評価へと繋がります。その意味で、大学では君たちが自分の課題を持って必要な知識をプロアクティブ（より積極的）に学修することを期待しています。

高等学校と異なり、高等教育では15週で45時間の教室内外学修時間を1単位と定義しています。実技実験以外の科目は1時間の授業に対して教室外での2時間の学習（予習と復習）と計3時間を基本としています。授業時間割表の「空き時間」は、予習と復習のための時間です。

すべての科目には授業計画（シラバス）が用意されていますので、これからはそれに従って君たちはより主体的に学習していくこととなります。君達が大学での授業スタイルに馴染み、よりアクティブに勉学を進めていくことを促進するために提供されている科目がFYE（First Year Experience）です。

社会（日本国内外）活動では、一層の自己管理が求められます。その一つは自分の健康と安全の確保です。日本社会の国際化にともない、昔のような「日本の水と安全はタダ」ではなくなってきています。本学の周辺街も、昼から夜への状況変化は著しく、夜は決して安全と健康的であるとは言えません。ひと時の快樂への誘惑も一段と強くなってきますが、そうした勧誘に打ち勝とうとの気を持たせるのは大学生としての自覚と責任です。高等教育とは社会へ巣立つ前に自己管理能力を身に付ける機会としてください。

この丘では大学生の他に3歳の幼稚園児（K）から高校生（12年生）までの玉川っ子たちも一緒に学校生活を送っています。そうした玉川の教育環境を踏まえ、今日から最高学府に学ぶ者としての自覚、誇り、そして責任を持ってこの丘での生活を送ってください。